



要録とした語りには感嘆! (撮影 高取)

立山、黒部のスキー登山に「学ぶ」
僕が立教大学の山岳部に入ったのは1927年、昭和2年です。スキーをやるつもりで入ったんです。スキーが相手だから、だんだん冬の山に行くようになった。最初に行った冬山が立山で、その頃

の立山は非常にスキーには向いていた。スキー登山の古い記録は、大正12年頃じゃないかと思えます。芦峠の連中は、まだスキーができてなくて輪かんじきで登っていた。立山から剣、毛勝、薬師というのは雪の直接ぶつかるところで、日本で積雪が一番多いところなんです。その立山に、立教山岳部ではまだ誰も行ったことがないからと、気負いこんで入ったんですが、もうすでに他の山岳部の先輩が入っておられた。そこで、3月に目指したのが真川の小屋、そこを中心と

雪の山に入って「体で覚える」
黒部へは、バリエーションルート求めて入るようになったんです。冬山というのは、眺望が非常にきくから、好きなどころにボンボン行けてうんと稼げるんです。そこでわかったのが、冬山というのはスキー登山じゃなくて、アイゼンとピッケルが主役であるということですね。

ただ、雪崩というのはどこでも、雪の質によっては非常に不規則もあるけれど、一定の法則があるようなものを感じたわけです。表層雪崩というものは、ある程度の急斜面にいくとすぐに落ちます。中腹以下のところでは、4月の中頃からそういう兆候が起きる。じゃあどうやってその雪崩を避けて登山をするかと考えたわけです。新雪が降って1日か2日が過ぎれば表層雪崩はおさまってくる。朝の凍っているうちは雪崩が起きないから、その間に登ってしまおう。それには自分の登高ペースとい

して薬師、黒部五郎、双六、鷲羽、黒岳だったわけです。いざ薬師を登り、黒部五郎の小屋へ入ってみると、スキーなんて活用することが少なくて、ほとんどアイゼンで歩けるんです。それはなぜかというと、スキーで高い頂上の峰筋に行くと風が雪をふっ飛ばして、固い雪だけが残るからなんです。

す。そして、下の廊下を中心として、立山、後立山を考えたけど、後立山は黒部側からの雪崩が多くて怖いから、誰も入ったことがなかったんです。だけど、雪崩というものはどこでも、雪の質によっては非常に不規則もあるけれど、一定の法則があるようなものを感じたわけです。表層雪崩というものは、ある程度の急斜面にいくとすぐに落ちます。中腹以下のところでは、4月の中頃からそういう兆候が起きる。じゃあどうやってその雪崩を避けて登山をするかと考えたわけです。新雪が降って1日か2日が過ぎれば表層雪崩はおさまってくる。朝の凍っているうちは雪崩が起きないから、その間に登ってしまおう。それには自分の登高ペースとい

連続講演会「語り継ぐ黎明期の登山……それぞれの山」 第1回 堀田弥一氏 「山に生きて94年・立山からヒマラヤへ」



2003年(平成15年)
12月号(No. 703)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

URL ● <http://www.jac.or.jp>

e-mail ● jac-info@jac.or.jp

目次

堀田弥一氏講演「山に生きて94年・立山からヒマラヤへ」……	1
野口健氏講演「エヴェレストから富士山が見えた」……	3
自然保護委員会・大台ヶ原登山道について……	4
海外の山……	5
100周年ニュース……	6
報告……	7
科学・登山位置把握画像伝送システム/総務・新入会員オリエンテーション/自然保護・全国集会/アルパインフォトビデオクラブ・撮影会報告	
支部だより 山梨……	9
東西南北……	10
超ベテランクライマー/バンフ・マウンテン・フェスティバル/短歌・弱視の友と/霧の旅会と同会の徽章/70歳から中国未踏峰に挑戦	
図書紹介……	14
Climbing & Medicine……	27
ルーム日誌……	16
会務報告……	17
図書受入報告・新入会員……	18
INFORMATION……	19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 …… 10~20時
水・金 …… 13~20時
第2、第4土曜日 …… 閉室
第1、第3、第5土曜日 …… 10~18時
年末年始休業日 …… 12月27日~1月5日

うものを知らなきゃならない。記憶によると、僕らの登高能力というのは、1時間500メートルだった。

1400メートル位から2900メートルが針ノ木だから、高度差の1500メートルを登るには3時間。その1500メートルを雪崩の危険を避けるためには、5時とか6時に出発すれば、9時までには完全に頂上です。途中休憩する時間を換算しても、1時間450メートル以上の登高能力があれば、割合に不安を感じないで稜線に到達できるわけです。こういうことが、雪の山に入って、体験的に体で覚えるということなんです。

1931年3月に東谷の川縁で野営して、黒部側から鹿島槍に登った時の1時間の登高は600メートルでした。普通、1時間の登高が600メートルというのは相当なもんです。僕らはその600メートルを登るのに何の苦痛も感じないで行けた。そういう体験を重ねていくことが体で覚えるということなんです。

「ヒマラヤへ」それは「自然に」

黒部から鹿島槍、そして黒部の谷にも入り、道の悪い後立山は夏に計画して信州側から入りました。それがたまたま、五龍や鹿島槍の初登頂になったわけです。

僕の願望は、毛勝から剣の縦走だった。毛勝から剣は、非常に降雪量が多いところで天気も悪い。同じ北アルプスでも穂高の方がずっと天気がいい。それで僕は穂高縦走をやったわけです。その穂高縦走が、学生時代最後の山登りです。学生時代は12月から1月のひと月、3月から4月のひと月、そしてその合間にも山に行く、それはもう……行きたくなつて。そういう生活を送っていた。その後、OBになつてから、鹿島の東尾根から八峰のクレットにも行ったけど、僕の本当の経験というものは、学生時代に集中して山に入った3年間の冬山生活なんです。

山登りでもスポーツでも、間を空けてしまうと良くない。続けて熱中している間に、知識も増えるし力もついてくる。山登りというのは、反復してやらないとダメ。練習だけでもダメ。実際に山に入つて経験を積み重ねていくことが、いろんなものを、発展して発明する。いくら理屈で聞いても教わつても、自分が体で覚えないと。そういう経験が自然に日本の山からヒマラヤに行くということになった。自然にね。

ヒマラヤに興味を持ったのは、長谷川伝次郎さんの「カシミールの山旅」の講演を聞いたのがきっかけです。長谷川さんは、Survey of Indiaの地図を持っていた。その地図を何度か見せてもらつて、うちに、ヒマラヤへ行きたいと考えるようになったんです。

「パウアー隊」から学んだ事

ヒマラヤへ行く時に参考になつたのは、パウアー隊の1929年の「ヒマラヤに挑戦、カンチエンジュンガの記録」です。ドイツ語のそれを辻先生が見つけてきて、訳してくださつて、一挙一動という感じの講座が始まった。そしてパウアー隊からふたつのことを学んだんです。一つはボーラー・メソッドという登山方式です。それまでの登山は、5人なり6人なり一緒に行動することが普通だったし、そんなものだと思われていた。しかし、別々の行動をしながら、ひとつの目的を達するという登山方式のあることを知ったんです。もうひとつは、お金です。僕が考えるには、ヒマラヤへ行くという背景には、国力と、お金がつきまといつてくる。パウアーたちは戦争の塹壕の中でヒマラヤへ行くこ

と語り合つた。そして、日本円にして2万円ではヒマラヤに行つたんです。それなら、僕らも何とか行けるんじゃないかと。

変わらない「山登りの味」

僕らがナンダ・コートに行つた時代は1ドルが2円、インドルピは1円30銭でした。そして、戦争という国際情勢があり、ネパールもチベットも鎖国をしてた。だから、自分たちの好きな山や好きなものを選ぶことができなかった。戦後、山の装備は大きく変わったけど、登山の本質は変わらないと思うんです。山の登り方にルールはなくて、各自思い思いでやれるわけです。これがいい、これが悪い、という批判もできないと思うんです。僕らの登山は、達成感を満足するというもので、ひとつひとつ解決される達成感がありました。そしてね、周りの未知を自分が知恵を働かせて克服し、解決するってことが楽しかったんです。これは普通の人生観にも通じることではないかと思うんですよ。

僕らの時代は、大正デモクラシーで、相対的にいって非常に自由でいい時代でした。冬山に行くと、誰にも束縛されることも制限され

することもなく、自分たちだけで楽しむことができた。そういうことが許された時代だったんです。その代わり不便なことがずいぶん多かった。山登りの味を覚えたのはそんな自由な時代にあつたから、そしてまだ未踏峰の山がヒマラヤにもゴロゴロしてたから。

立山からヒマラヤへ

僕らがナンダ・コートに行く時、「ヨーロッパの水河も知らんでヒマラヤへ行くって」と言われた。しかし違うことがあるんです。ヨーロッパの山は、僕に言わせりゃ岩山です。日本には雪の山がある。ヒマラヤへ行くと、雪山で育った人と雪山の方が通用するんです。

あまり岩はないし、雪でかぶさっているし、積雪量は立山よりはるかに少ない。そしてね、見てもらんなさい、冬の黒部を登るとスノーブリッジがあるでしょう。あれが氷河のクレバスと同じことなんです。だから日本の冬山で十分経験することもできる。

今、日本では夏山が主で、冬山の悪いところ、困難なところを経験することがあまりない。登山というのは頭の中で抽象的に考えるんじゃないくて、自分で具体的に計

画し体験して、そして体で覚えていく、それが大事じゃないかと思うんです。(奈良 千佐子)

【10月16日、東京体育館(参加者106名)で行われた、資料・映像委員会主催の講演会記録を元に編集】

堀田弥一(立教大学OB) 主な山歴
1929年 五龍岳 唐松岳(厳冬期五龍岳初登頂)。30年 唐松岳、不帰、白馬岳縦走(積雪期初縦走)。鹿島槍ヶ岳冬期初登頂。31年 槍ヶ岳、穂高岳、ジャンダルム冬期初縦走。
36年 ナンダ・コート初登頂(日本人として初のヒマラヤ遠征)。54年 マナスル第二次登山隊隊長を務める。

●資料・映像委員会では日本山岳会創立100周年に向け、連続講演会を企画・実行しています。日本の黎明期の登山史を知る先覚者にご登壇いただき、その生の声と映像を作成・継承するというのが趣旨です。2003年から2005年12月の間に5回の講演会を企画し、詳細は会報に掲載してお知らせいたします。先覚者の生の声、と、真摯な山への取り組みに触れる意義深い講演会です。ぜひご参加下さい。(資料・映像委員会)

第13回山を語る

「エヴェレストから富士山が見えた」

図書・自然保護委員会共催

エヴェレスト清掃登山に取り組んできた野口健氏を講師に招き、10月10日、東京都体育館で講演会を開催した。概要は以下の通り。

このたびは日本山岳会から講演の招聘を受け光栄に思う。七大陸最高峰登頂の最終目標エヴェレストに行つた時、そこには写真や映像になかったゴミ、空ボンベなどがたくさん散らばっていた。しかし登頂を成功させることに夢中で環境問題を深刻に考えていなかった。

ベースキャンプで国際公募隊がゴミ集めを提案した。ゴミの中に



「富士山が変われば日本が変わる」と野口さん

日本隊が残したものがたくさんあり、作業していたヨーロッパ人たちから「経済は一流、マナーは最低」と日本を否定され、「エヴェレストを富士山にするのか」など強いバッシングを受けた。メスナーが富士山を世界一汚い山と言っていたらしく、夏の富士山に登つて初めてメスナーの言葉が理解できた。環境問題提起のために持ち帰ったこれらのゴミを都庁で展示したところ、日本の山岳界に対する批判と受け取られたのか、脅かされたこともあった。

2000年3月、8000メートルでゴミ拾いを提案したところ、シェルパたちから拒否された。元々カースト制度のある国で、シェルパは清掃業の階層でない。担ぎ下ろしたゴミの重量に対して対価を支払うボーナス制度を採り入れるなどで説得した。それが3年目には彼らが他隊のシェルパにゴミ問題で注意するまでになった。超高所で作業する限り、身体を壊しなくなるシェルパもあり、一時は清

掃登山を止めようとしたが、「自分たちのネパールの山を美しくする作業だ、続けたい」と頼まれた。

4年間で7・7トンのゴミを持ち帰った。山でのゴミ処理マナーはその国のマナーレベルと一致しているようだ。今年の東京農大隊はローツェ、エヴェレストの両峰に登頂する快挙をなすとともに炊事水を流す時に濾過器を通すなど環境面でも万全の配慮がなされた。

富士山は頂上に自動販売機が並ぶなど世界に例のない山だ。この山小屋でもゴミとトイレ問題には手を焼いている。「プチ富士が日本中にあるので、富士山が変われば日本が変わる」と思う。富士山麓で開講している自然教室で学んだ子供たちに、環境メッセンジャーになって欲しいと願っている。シエルパの中には命を落とした人も多い。しかし遺族への補償は不十分で、彼らの子供を支援する「シエルパ基金」を設けた。

終わりに自然保護委員会篠崎仁担当理事が、野口健さんの活動と自分たちの活動に何か接点がありそうだ、今後、協力できるものがあるれば一緒にやっていきたいと述べた。聴講者80人。(南井英弘)

大台ヶ原の登山道について (承前 会報701号) 環境省「市民の要望95%認める」

自然保護委員会

環境省は10月8日、大台ヶ原周回線歩道基本計画最終案を決定した。

- 基本的に、コンクリートを使った階段工事は一切行わない。
- 予定していたベンチ、休憩所の設置は取りやめる。
- 整備後30年を経たコンクリート階段で、基礎が流水で洗われて浮いている部分は撤去して、大杉谷の水成岩を使って石組にする。
- 大雨で洗掘された箇所は側壁を石組で補強する。
- ぬかるんでいる箇所は太丸太を2本並べて様子を見る。
- 樹木の根が露出しているところに木製デッキをかぶせない。
- 破損したPC偽木は撤去し、岩や土となじんで安定しているものは将来壊れた時点で整備する。長く出ている鉄杭は切断する。
- コンクリートを使わない石組が流水で崩れた場合など、手仕事で直せる程度の補修予算はあるので、歩道の様子を注意深く見ながら順応的整備をしていきたい。

環境省の当初の計画では、歩道を「登山道」と「園路」にゾーニングしていたが、最終案では名言しないまでも歩道をすべて「登山道」と認識して、観光客のために歩きやすくする工事は取りやめた。雨水で洗掘された歩道も「雨の時は川になるが我慢してほしい」とした。我々が主張してきたことである。

昨年9月の第1回現地説明会をうけて作成された基本計画では、木道「空中回廊」への反省がみられず、依然として観光客の歩きやすさを求めた整備計画であっただけに、この最終案は評価できる。

1999年に最初の木道工事が施行された時点で周回線すべての測量、設計がすでに終わっていたと聞く。爾来4年、よくぞ撤回したものだ。すでに3億円近い税金が費やされたが、今回の予算は大幅削減であろう。

この10月12日に開催された自然保護全国集会で、会員北原正宣氏から立山においても環境省、業者と現地に立ち会って1区単位で整備方法の検討をしているとの報告があった。行政が整備計画を事前に公表し、国民の意見を求めるなど、今までになかったことである。

環境省は本年2月に公表した「山岳地域における歩道のあり方」で、歩道を登山道、探勝歩道、園路にゾーニングしているが、机上の空論であって現実的でない。この手法はすでに大台ヶ原で挫折した。山岳地域の歩道はすべて登山道と認識して、きめ細かな整備を行い、利用者に対して情報公開、教育をすべきであろう。(田村 義彦)

■コメント

8月26日の現地説明会をうけて環境省は上記の決定を行った。これは今まで考えられなかった画期的な判断といえる。

田村義彦氏は、関西支部会員で「大台ヶ原・大峰の自然を守る会」の会長として1976年以来日本山岳会と協力して活動してきたが、この決定を環境省より引き出した同会の活動を多としたい。

大台ヶ原は、オーバーユース対策、鹿駆除の差し止め、さらには自然再生事業への対応等多くの問題をかかえている。自然保護委員会は関西支部と連携しながら大台ヶ原の自然を護るために活動を続けていきたいと考えている。(篠崎 仁)

海外の山

12月11日は
「世界山の日」

江本 嘉伸



イラスト・宇都木 慎一

やり過ぎしてお知らせで恐縮だが、「山」についての国際的なイベントについて。ローマにある国連の食糧農業機関（FAO）によると、ことしから毎年12月11日を「The International Mountain Day」とするという。

昨年02年の「国際山岳年」を記念して、「山岳パートナーシップ」（正確には「the International Partnership

for Sustainable Development in Mountain Regions」＝山岳地域の持続的発展のための国際的協調）の新しい取り組みが始まったことは、すでに紹介した。その運動のシンボルとしてFAOが提案、国連で承認したものだ。すでにロゴが決まっており政府代表、NGOなどは山の日が来るたび「山の存在を祝い、山々の問題を思い起こすために」このロゴを使用して、人々に呼びかけることができるという。

「山岳パートナーシップ」は、昨年の「ヨハネスブルグ・サミット」（8月26日～9月4日）で、提起された。国際山岳年以後も、国際社会は協調して山の問題に取り組む、という決意だった。

アフガニスタン、ブータン、ネパール、フランス、ペルーなど32か国と15の国際機関が正式に加盟した。中でもイタリア、スイスはこの活動のための資金の支援を約束し、「山岳パートナーシップ」の第1回会合はことし10月5、6日、イタリアのミラノで開かれた。

日本は、この山岳パートナーシップには目下加盟していない。しかし、日本委員会に代わる新たな組織として、2004年春、「YAMA-NET JAPAN」が発足する予定で、政府

機関と相談の上、将来は参加することになると思う。事務局長は02年春に誕生した「信州大学山岳科学総合研究所」運営委員長、高石道明教授（日本山岳会の新人会員でもある）が引き受けてくれた。「世界山の日」にどう対処するか、おいおい議論されるだろう。

ところで、どうして12月11日が「山の日」なのか、FAOの担当者に問い合わせたが、具体的な理由は聞けなかった。おそらく国連の1年のカレンダーのようなものがあつて、空いている日が選ばれたのではないか。この点については、わかったことあれば後日紹介する。

日本では国の山の日が決まっていないが、日本委員会では02年7月に開いた「富士山エコ・フォーラム」で「日本に山の日をつくらう」と呼びかけた。山を総合的にとらえ、その素晴らしさを次代に引き継ぐことは、いまの世代の責任とも思うからだ。日にちについては提案していないが、広島県が「6月第1日曜日」、山梨県が「8月8日」（やまなし・やまのひ）というふうに、県別にはすでに「山の日」を持っているところもある。夏のどこかに設定するのが普通で、冬場に「山の日」のイメージはない。

12月6日の晩餐会でマタギに詳しい秋田支部の皆さんと同席した折この話をしたら、「12月12日なら、山の神様の祭りの日だ。11、12日と連休にしたら面白いのでは」という。なるほど、12というのは、山の神の数字なのだ。

「マタギ」の自然観をフィールドで追っている異色の学者、田口洋美氏（東大大学院）の著作『越後三面山人記』（えちご・みおもて・やまんどき）に、以下の記述がある。

（猟師たちは）山に入ってから十二日目嫌っていた。十二というのが、山の神様の数字だからだ。毎年十二月十二日がカグラと呼ばれ山の神のまつりなのである）

山を最も熟知しているのは、実はマタギと呼ばれる山の民たちではないのか、と田口氏はことし4月、国際山岳年日本委員会が東京で開いた「国際山岳年クロージング・シンポ」で話していた。山岳遭難救助で頼りにされるのも、登山道以外の山を知っている猟師たちだ、とも。

国際協調は大事と思うが、決められたから従う、というのでは意味がないし、おもしろくない。「世界山の日」が偶然、12月に選定されたことで、「12」という数字と「山」の関係を考えることになった。

100周年記念事業募金のお願い

芳賀 孝郎

平山会長から会員の皆様へ度々お伝えしていません通り、2005年の100周年記念事業には、会員の全員参加と全理事および役員が各記念事業委員会の責任者として参加することを目標にしています。「全員参加の100周年記念」を目指しています。

100周年の記念登山事業は、各支部の参加する中央分水嶺踏査の国内登山、本部と支部の計画している海外登山などがあります。文化事業は百年史、新日本山嶽誌を刊行、資料委員会と図書委員会による展示会、講演会などの開催を計画しています。登山と文化の両事業を全会員で実施する予定です。この計画を実行するにあたり、会員の皆様の募金についてのご支援とご協力をお願い申し上げます。

募金目標と募金方法、募金委員は次の通りです。

募金目標	85000千円
内訳	会員募金 45000千円
	企業募金 15000千円
	長期積立金 25000千円

これまでの周年記念事業は、大きなヒマラヤ登山を中心にしてきました。ひとつの大きな目標を持ってやってまいりましたが、今回は多くの会員が参加する、多くの目標に向かって実施していくことになります。そのため、宣揚的ではないので、各種企業からの寄付は多く望めない状況です。会

員がお互いに助け合い、協力しあって、100周年事業を成功させる必要があります。

この観点から、募金委員会としては、第一に会員からの募金を考えました。各支部は支部長に募金委員をお願いし、首都圏においては各県ごとに募金委員を設けて3000円/年×3回の寄付を100歳の方々に賛同いただきたいのです。

第二には、過去の記念事業の経験者でかつ人脈に通じた方に募金委員になってもらい、その委員より会員の有力者へ特別募金と、新聞社、テレビ局などの企業への募金をお願いする予定です。

現在の厳しい経済状況のなかでの募金のお願いは心苦しい限りですが、会員の皆様のご理解とご賛同をいただきまして、100周年記念事業の募金にご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

(100周年記念事業募金委員会 委員長)



山の仲間 版画・奥野溪石

100周年記念事業11月30日現在の募金状況

●寄付者 1978人 ●金額 5984千円 (会員数6039人に対し、寄付率32.8%)

募金委員会では、全会員の皆様にご寄付をお願いしております。現在のところ、寄付率の一番高い北九州支部でも45.7%にとどまっております。100周年記念事業の成功に向けて、会員各位におかれましては本募金にご協力くださいますよう、お願い申し上げます。

報告

REPORT
12月

科学委員会

「衛星移動通信サービス を利用した登山位置把握画像 伝送システムについて」

創立100周年記念事業「中央分水嶺踏査」の一環として、10月16日、NTTドコモの松本彰氏を講師にお招きして、講演会を集会室で開催しました。

おもな内容は、まず衛星移動通信とは、どんな仕組みで、どんなものか、ドコモが行っているサービスの現状、サービスのイメージ、システムの構成、期待される可搬型衛星通信端末「ワイドスター・デュオ」の紹介と、特に山間部における利用方法が説明された。

また、最近サービスを始めた、携帯電話によるGPSシステムについて、山での緊急通報、位置

確認の他、山小屋や山の情報等が検索・閲覧できるなどの紹介がされた。

GPSでは現在地点を確認できるが、通常の山行では「それがどうしたの」という程度のことで、非常時に他の地点の人と交信ができなければ実用性がない。上記の「ワイドスター・デュオ」は、すでに70の山小屋が加入契約をして、いわゆる衛星電話を設置しているそうであるが、そのような、立派で大規模の小屋より、私たちが逆に必要とする地区、たとえばあまり高名ではない山域、無人小屋、一般ルートではない場、等々には、もちろん設置されているはずもない。可搬型とはいえ1・7kgの重さで付属品のかさばることを考える時、まだ実用にはほど遠く、しからば携帯電話といえ、日頃私

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

たちが体験しているごとく、本来のサービス区域から外れている山間部では交信困難な点が多い。

当然のことながら、「商売として成り立つことが前提」の企業が全国的規模でサービスを提供することには無理があるのだろう。

「山屋さんよ、そんな金にならないこと、やれるかよ」といった感じになる。しかし、当該企業の専門家による、整理されてカラフルなレジュメを用意されての講演はわかりやすく、よい勉強になった。技術革新の進む分野なので、継続的に勉強していきたいものだ。

(宮津 公二)

総務委員会

新入会員

オリエンテーション開催

10月18日、山岳会ルームにて昨年のオリエンテーション以降に入会した会員204名を対象に開催した。出席は25名である。

平山会長の歓迎のことばに続き、100周年事業および組織と活動の説明が続いた。同好会紹介を交え、最後の懇親会まで熱のこもったオリエンテーションとなった。

当日、自己紹介を最初に行った岸会員から感想文を寄せてもらった。

(遠藤 源太)

平山会長の歓迎のことばで、山岳会の平均年齢が63歳であることを知りました。204名の平均年齢が気になって、総務委員会の方に協力をお願いいただき調べてみました。結果は55・9歳……我々が年度は、多少、山岳会の平均年齢を下げるのに貢献しているようです。

63歳という平均年齢は率直に言うて意外でしたが、また、日本山岳会の特徴を表しているとも言え

極北の
神秘
オーロラ

世界の

- ① スウェーデン／アビスコ 7日間
- ② 北緯78度／スピッツベルゲン 8日間
- ③ アラスカ／アースソングロッジ 8日間
- ④ アラスカ／チナ温泉 6日間
- ⑤ カナダ／フォートマクマレー 7日間
- ⑥ カナダ／イエローナイフ 6日間
- ⑦ グリーンランド 8日間



国土交通大臣登録旅行業第490号／日本旅行業協会正会員 日本CFP協会員

アルパイン ツア サービス 株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1 西新橋1森ビル2F ☎03-3503-1911

大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557

e-mail: info@alpine-ts.co.jp http://www.alpine-tour.com

るのではないのでしょうか。その歴史の長さや人脈の豊かさ、そして登山と登山に関わる広範な活動が若者を主体としたスポーツと異なる意味合いを持つことのひとつの証であると思います。

登山のスタイルや山の楽しみ方は、各人各様、私はいえ「山を歩くこと、そのもの」が楽しくて今まで山を歩いてきました。今後はお世話になった山々へ何らかの恩返しをしつつ山を歩き続けていきたいと願っています。

(岸 哲生)

自然保護委員会

自然保護全国集会

岐阜で開催

2003年度自然保護全国集会が80名の参加者のもと、平山会長を迎えて「環境保全と登山のあり方を考える」をメインテーマにして岐阜県下呂温泉ホテルパストゥールで行われた。11月11日の下呂御前山でのプレ山行、12日の会議、13日のポスト山行と全3日の日程だった。ポスト山行は乗鞍岳の自然観察登山など12日の会議で勉強した内容を实地で歩いてみるプラ

ンが織り込まれていたが、折から大雨のため残念ながら中止のやむなきに至った。

12日の会議は近來になく盛り上がったものになった。最初に、代表数支部から各支部の自然保護活動の状況報告がなされたが、特徴的だったのは、かつての対立一辺倒の自然保護活動から、自神や高尾のように官民が協働して自然回復に取り組む活動や、大台ヶ原のように自然保護という一致した方向性の中で、どのようにそれを実現するかの方法論の議論が主流になってきており、二十一世紀を迎え、自然保護活動の流れが大きく変わってきていることがうかがわれた。

メインテーマは、今年5月からマイカー乗り入れ禁止措置がとられた乗鞍スカイラインをめぐる諸々の問題を中核材料として、山岳環境保全のあり方全般について議論が交わされた。乗鞍岳の高山植生とライチョウ棲息環境、高山環境と付帯設備のあり方、乗鞍岳の高山環境の今昔などのテーマ報告の後、「山岳環境と野生生物の未来」、「車両規制の功罪—乗鞍方式を考える—」のふたつのテーマ討

論が行われ、最後に「環境保全と登山のありかた」の総合討論で締めくくられた。

「せっかくの議論をその場限りのものに終わらせないで、今集会の総意として岐阜県が実施したマイカー乗り入れ禁止措置に対する支援声明的なものをまとめたかどうか」という平山会長の提案もあり、別途岐阜県知事宛の文書を作成することにした。

以下、当日の平山会長の挨拶の要旨を紹介します。

「日本山岳会はその創立趣意書のなかで、単なる山登りだけの会ではない、山登りを中心として学術、芸術、文化を語り合う会だと明快に述べられています。山登り以外の目的のひとつは自然保護活動の推進であります。

長い間自然保護活動は、山登りの影にかすんでなかなか陽の目を見ることでできませんでしたが、近年になってやっと、日本山岳会にもう少し力を入れなければならぬ、日本山岳会は登山と併せて自然保護活動の推進を果たすべきではないか、と言われるようになりました。

最近私は機会を得てヒマラヤと

南極を旅行してきましたが、ヒマラヤでは40年前に見た景観が氷河の後退で昔の面影が相当なくなっており、南極では、棚氷が大きく崩壊して、正に地球は大きな危機を迎えていると言ってもいいと思います。

日本山岳会の自然保護委員会は昭和39年、当時の会長松方三郎さんによって作られ、来年は40周年を迎えるそうですが、私は、その当時、松方会長の下で若輩の理事として松方会長の熱のこもった自然保護の精神を聞いたことを大変懐かしく思い出しております。

日本山岳会は創立100年に向けて幾つかの自然保護に関する活動を手がけております。青森のブナ林再生事業、東京の高尾の森の活動などですが、この程度では足りないと思います。さらに、こういった時機を得て、皆さんの力をお借りして、これから皆で美しい地球を守っていただきたいと思っています。

最後に、この集会実現のパートナーとして大変なご努力をいただいた岐阜支部の方々に紙面を借り厚くお礼申しあげます。

(山川 陽一)

アルパインフォトビデオクラブ

撮影会報告

10月5、6日、磐梯朝日国立公園吾妻連峰で吾妻小舎をベースに撮影会が行われた。参加者14名(うち女性5名)。

8月23日に偵察に行き、山の状況、交通アクセス、山小屋を見てきた。吾妻小舎の主人遠藤氏とは毎年上野松坂屋で開催する夏山相談室で一緒になり、羽田先生とは知己の間からで、いろいろ情報が得られた。今年の夏は天候不順で紅葉はどうかと心配しながら5日の撮影会当日を迎えた。

磐梯高原、吾妻小富士、東吾妻でそれぞれが撮影してきた。打ち合わせもしなかったが、ほとんどの会員が小屋の近くの桶沼に集まっていた。ここからの一切経山も赤いナナカマドを手前に入れると圧巻である。桶沼から小屋の前の湿原に移動して吾妻小富士を撮る。1本の松の木が印象的でこれをポイントに撮っている会員もいた。

暗くなるころ全員が揃い、今日の成果を話しながら夕食の時間となった。羽田先生の挨拶、乾杯の

音頭で楽しい懇親会が行われた。この小屋の料理は定評があり十分満足した。自家発電なのでスライド勉強会はやらす、9時の消灯まで有志が別室でささやかに2次会をやりながら、写真談義に花を咲かせた。

6日、6時朝食、7時出発で行動がはじまる。自由撮影であるがほとんどの会員は一切経山に向かう。紅葉の色づきがよく、フィルムをどんどん消費しながら一切経山に登る。登り着いた山頂には大きな石積みと祠があり、さえぎるもののない大展望が待っていた。眼下に魔女の瞳と呼ばれる五色沼が見え、高橋、藤田両名が瞳に見せられ下まで下っていた。

時間をかけ撮影をして頂上を辞す。酢ヶ平から鎌沼に行き、水と紅葉の妙をカメラに収める。鎌沼は文字どおり鎌の形をした沼で、移動するほどに撮影ポイントが変わり、水、岩、山稜に紅葉を入れて撮り、時間が経つのを忘れるくらいであった。

下山は姥ヶ原から浄土平に向かう。左に展開する赤い海と一切経山に名残を惜しみ、撮影会を終了した。

(山本 武志)

JAC
支部だより

山梨支部

第44回木暮祭

今回の碑前祭は、春と秋の年2回の催しを秋に一本化するとともに、地元観光協会の都合で例年より2週間繰り上げて開催した。

9月27日、キノコ狩りと懇親会。秋の味覚キノコ料理による懇親会を企画し、勢い山の中に入ったが、肝心のキノコの姿がなく、キノコ鑑定においては県内で第一人者の、森林総研の柴田氏に鑑定を依頼するキノコも、ままならない状態だった。

全国各地の支部から、独自の活動状況をレポートします。

しかし、差し入れのナメコ茸やイワナ、事前に購入したマイタケでかるうじて面目を保ち、県外参加者に喜ばれた。また、宿泊先にしたリーゼンヒュッテは、屋外施設が整っており、春の碑前祭と比べ設営の労は非常に軽く済んだ。

9月28日、記念登山と碑前祭。絶好の登山日和に恵まれ、参加者一同山岳連盟の親子登山教室に合流し、のんびり初秋の横尾山を楽しんだ。横尾の肩では、100周年記念事業の分水嶺登山ルートとなる、小川山から信州峠の山域を入念に観察するとともに、内藤、遠山両委員の描く水彩画とボタニカル・アートを興味深く鑑賞した。下山後、金山平の木暮翁碑前にて恒例の碑前祭行事と記念講演を、時間の経つのを忘れ聴き入った。終了後、地元観光協会役員手作りのキノコぼうとうをいただくが、ぼうとうには例年のキノコの姿がなく、珍しいが風味に乏しい松茸ならぬマスタケの姿が今年のキノコの不作を物語っていた。

散会16時半。

(坂本 桂)

創立100周年記念事業にご協力を

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき一〇〇〇字程度でお願いします)



イラスト・宇都木慎一

超ベテランクライマー 三倉岳の決戦?

兼森 志郎

この春、京都支部から10月の例会山行を三倉岳(広島県大竹市)でやりたいのでよろしく、との申し出があった。斎藤惇生さん(元会長)が昨年、宮島での全国支部懇談会の帰り、有志と三倉岳に挑戦し、お年の割りに?見事なクライミングを披露され、広島支部の世話焼き人一同に、驚きと感動を与えた経緯もあり、快諾した次第。実は過去にも1度、海外遠征の強化合宿でいらしており、今回は3度目ということらしい。

広島島の登山家の間では知れ渡っている、多彩なルートのとれる三

倉の岩場だが、最近では、首都圏や関西のクライマーもわざわざ訪れるほどの、魅力ある存在となっている。今は亡き高見和成氏も愛してやまなかったホームゲレンデで、余談ながら、マツタケの秘密の生息地を誰にも教えずに高見さんが他界したことを、残念に思っている人も多いと聞く。

10月11日、途中参加者も含めて、京都支部から斎藤クライマーを始め、8名の名クライマーが勇躍乗り込んで来られ、迎える広島は老若男女15名、総勢23名が麓のキャンプ場に勢ぞろい。平生の例会山行には顔を見せない会員も、斎藤さんが来る、ということので、遣り繰りして駆けつけた。昼から一般道を山頂まで合同ハイキングで軽く足慣らし。夜は「伏見と西条」

の酒の競演となり盛り上がりを見せる。早朝から密かにマツタケ狩りをして、みなに振舞ってくれた、ダッチオーブン料理も華を添えた?焚き火を囲んでの四方山話は尽きることはなかった。

12日、いよいよ登攀の日となる。京都5、広島7、合計12名のクライマーが、中の岳(標高差約150m、5ピッチ)のノーマルルートに挑む。高度感もあり、身体をつつこむような内面登攀とフリクション技術を駆使するタフなルートである。京都側の大將斎藤さんは、当年とって74歳の超ベテランクライマーであることは内外に知れている。ご本人も今日は、三倉最高齢のクライマーとして登攀の喜びを味わうおつもりのように見える。

ところが、とんでもない伏兵が現れた。「ワシも行くと」言い出したのは、片山数雄永年会員氏(83歳)か月・日大山岳部OB)。ま



「ワシも行くと」83歳、片山氏



京都、広島支部からクライマー集結

さかの発言に「ほんまかいのう」と一室哑然。かつて、三ツ峠で鍛えた桜門山岳会会員とはいえ、時効も過ぎて遙かの人。一体どうなることやら。ところが、あれよあれよと言う間に、1ピッチまた1ピッチと、ついに弱音を吐くことなく完登してしまった。多分、流りのハーネスもクライミングシューズも初めてだったはず。よくもまあ、と、一同2度目の哑然。けっして華麗な登攀ではなかったが、その執念たるや脱帽するしかなかった。一方、寡黙にそして華麗に登攀される現役クライマーの斎藤さんは見るものを魅了する。

その夜の懇親会は、伏兵氏の話で持ちきり。「参った、参った、

記録は破られるためにあるんですから」としきりに、敬意を表されている謙虚な斎藤さん。伏兵氏も「はずかしいことです。決して登ったではありません。登らせてもらったのです」と、その情景は清々しいものだった。

懇親会には、前日、島根・広島県境で行われた、チベットの探検家能海寛を記念する1000^キマラソン試走会に参加したばかりの江本嘉伸さんも加わり、モンゴル相撲の内幕など普段は聞けないモンゴル話で賑わった。期せずして京都、広島、東京のユニークな会員たちが集った、実に楽しく充実した三倉の交流例会だった。

バンフ・マウンテン・フェスティバル

サッチ 益田

11月1日から9日間、カナディアン・ロッキーのリゾート、バンフでマウンテン・フェスティバルが開かれた。

第10回図書フェスティバルにはアメリカの環境作家ピーター・マティソン、インド生まれの北極写真家シャバンカ・バナジ、南北

両極地を徒歩で横断したノルウェーのボーガ・オースランド、1982年、エヴェレストで行方不明になったイギリスのジョー・タスカの元恋人マリア・コフィーがカナダから招待され、アラスカの石油開発、極地冒険旅行、山岳遭難の代償などが語られた。

応募された151冊の図書から最優秀図書には1937年に初登されたアラスカの未踏峰を扱った『エスケープ・フロム・ルカニア』デイブ・ロバーツ著(アメリカ、2002年)が選ばれた。

エヴェレスト初登50年を記念して開かれた第28回映画フェスティバルには1953年イギリス隊の隊員ジョージ・ロウがニュージランドから、テンジン・ノルゲイの孫でエヴェレスト登頂者のタシ・テンジンがオーストラリアから、エヴェレストに7回登頂しているミスター・エヴェレストことピーター・アサンズがアメリカから招待され、エヴェレスト登山の裏話を披露した。応募された307本の映像作品から最優秀映画にはサッカー・ワールドカップ最下位決定戦を記録した『ジ・アザール・ファイナル』(オランダ、2

002年)が選ばれた。

カナダの山岳会で功績のあったクライマーに送られるサミット・オブ・エクサラナス賞は、1955年オーストラリアからカナダに移住し、山岳救助隊を国立公園に作った山岳ガイド・ウィリー・フイスターが受賞した。

第8回バンフ山岳写真展では3300の応募作品から最優秀写真に『ツームストン、秋の夕暮れ』(フィッツ・ミラー、カナダ)が選ばれた。

◇図書フェスティバル入賞作品
最優秀賞 上記

ユングフラウヨッホにいちばん近い村、ウェンゲンの家庭的なホテルアイガーと、スイスの旅の専門店アルプスウェイが自信をもってお勧めする共同企画。

アルプスウェイご利用で、ホテルアイガーにお泊まりの日本山岳会会員様へ4つの特典。

1. ユングフラウのよく見えるお部屋を優先的にご提供。
2. 民族料理フォンデュをご滞在中の夕食に1回ご利用。
3. アルプスウェイ駐在員による1日の専属ガイドサービス。
4. ホテルのオーナー、フックス氏より地元産リキュールをプレゼント。



あなたのスイス旅行を、このホテルアイガー滞在を組み入れてご利用します。

お問合わせ
お申込みは **アルプスウェイ**

<http://www.fellow-travel.co.jp/>

〒150-0043 東京都渋谷区道玄坂2-16-8 ビジネスヴィップ渋谷ビル4F

Tel.(03)5489-9541 Fax.(03)5489-6300

e-mail alpsway@fellow-travel.co.jp

〒530-0002 大阪府大阪市北区曽根崎新地2-3-13 若杉大阪駅前ビル6F

Tel.(06)6347-8984 Fax.(06)6347-8986

e-mail osaka@fellow-travel.co.jp

主催:株式会社 **フェロートラベル** ボンド保証会

国土交通大臣登録旅行業664号 協賛:ウェンゲン観光局・ツェルマット観光局 後援:スイス政府観光局

ALPS WAY.
We Love Swiss

山岳文学賞「ホエアー・ザ・マウンテン・キャスト・イット・シャドウ」マリア・コフィー著(アメリカ、2002年)
山岳歴史賞「テンジン、ヒーロー・オブ・エヴェレスト」エド・ダグラス著(アメリカ、2003年)
冒険旅行賞「ザ・アンソポロジー・オブ・タコイズ」イレイン・モレイ著(アメリカ、2002年)
2004年のマウンテン・フェスティバルは今回と同時期に開催される。詳細は左記に照会のこと。
Mountain Culture at The Banff Centre
Box 1020 Banff, AB, Canada T1L 1H5
www.banffmountainfestivals.ca

霧の旅会と同会の徽章

山崎 郁郎

霧の旅会は大正8年に創立された。東京府立工芸学校OBの松井幹雄が山好きの同級生に「山の紀行集を作ろう」と呼びかけ、発起人として松井の他、山崎金次郎、田沢昌介、田沢康男の4名が田端の田尻宅に集まり発足した。

短歌

弱視の友と

大橋 克也

忘れかけし山行を待つときめきを弱視の友にハッと教わる

登るより坂の下りを苦しとす鍼を生計の友に手を貸す

月に一度の山路を登る喜びを弱視の友は足で語りき

谷の向こう巢穴を出てし羚羊と睨み合う間を吹雪すぎゆく

雪に棲む羚羊の角を持ち牛のまなこでこなたを視詰む

他界との接点とふ山の端に鎮かに静かに沈む日輪

発起人4名に石川孟範、田中実が正会員、他に準会員7名の合計13名で始め、すぐに入会者があり、最盛期には130名前後まで増えた。日本山岳会との関係では、同年9月7日、府立工芸学校講堂で松井の司会で山の講演会を開いたとき、松本善二が日本山岳会から幻灯機を借りて「マッターホルンの話」をした記録が残っている。

霧の旅会の発足当初、正会員のうち、日本山岳会の会員は松井ひとりであったが山岳会の会員の入会者も増え、ふたつの会の関係は深まっていた。後に霧の旅の中心となる木暮理太郎、武田久吉両氏入会の経緯は想像する以外にないが、大正9年に制定された日本山岳会の第2次会員の製作に関わっているように思われる。

明治42年に制定された日本山岳会第1次会員の章は銀台で七宝製、山を三角形に現わし、中心に雪の結晶を配した凝ったものであった。和服に着用した場合に三角の先端で破れやすく、七宝が剥落、など登山に向いていなかったため、大正9年に現在の会章に変更されたが、このデザインは武田、梅沢親光、中村清太郎の3幹事が決め、

武田が旧知の松井を通じ府立工芸学校に製作を依頼したことに関係がありそうに思われる。

そして武田が私淑していた木暮を誘ったのではなからうか。霧の旅会は大正10年10月に武田を、11年11月に木暮を名誉会員に推薦している。そして日本山岳会がそうであったように、霧の旅会も木暮を中核に活動するようになる。

紀行文を中心とした機関誌『霧の旅』は発会当初から発行され、会の徽章は昭和4年に松井が中心になり製作した。松井の名著『大菩薩連嶺』は会報『霧の旅』の連載に加筆して出版されたものである。そして会報に多く執筆していた松井が昭和8年急逝したことは会の打撃となった。

日本山岳会会員で霧の旅会会員は木暮、武田両氏のほか、松本善二、神谷恭、野口末延、牧野衛（以上名誉会員）、尾崎喜八、田口三郎助、塚本閔治、原田幹一、松本熊次郎、吉田久兵衛、鶴岡元之助、神奈川甚吉、足立源一郎など錚々たる人たちがいたが、現在元気なのは牧野、原田の両氏だけと思う。

会の忘年会は山小屋でやる慣わしで、写真の披露、映写会が行わ

ポカラ国際山岳博物館オープニング記念トレッキングのご案内

後援：(社)日本山岳会 (社)日本山岳協会 (社)日本ネパール協会

国際山岳博物館の建設は、ネパール山岳協会(NMA)のかねてからの念願でした。日本山岳会をはじめたくさんの方々からの支援を得て、来年2月5日には、グランド・オープン運びとなりました。これを機会にぜひポカラへお出かけください。(NMAよりのメッセージ)

- A** エベレスト展望トレッキングとポカラ 12日間 1/28(水) 発 412,000円
 主催：ヒマラヤ観光開発株式会社(1種1014号) 電話03-3574-8880
B マナスル三山展望トレッキングとポカラ 10日間 2/3(火) 発 318,000円
 主催：アルパインツアーサービス株式会社(1種490号) 電話03-3503-1911
C アンナプルナ山群展望トレッキングとポカラ 7日間 2/3(火) 発 268,000円
 主催：株式会社ウェック・トレック(1種1662号) 電話03-3437-8848

れた。会員の持っていたカメラもツァイス製やライカ、ローライ、で8ミリや16ミリの撮影機も高級なものであった。

会の中核だった木暮が昭和19年に亡くなり、金峰山麓の金山平にあるレリーフと顕彰碑の建設、日本山岳会山梨支部、霧の旅会、が中心となつて続いてきた木暮碑前祭開催の経緯は『山岳』第93年の佐藤久一朗伝に詳しい。

木暮亡き後の霧の旅会の活動は、昭和25年の日本山岳会お茶の水ルームの談話室の完成とともに始まった土曜会と切り離すことができない。戦後アルコール類が入手困難な時にニツカの社長だった加賀正太郎がウイスキーを供給して始まった土曜会の集まりは、神谷バーと呼ばれたように霧の旅のメンバーと成瀬岩雄、田辺主計、山崎安治らの常連が集い、霧の旅山行にもしばしば同行している。1年に52回ある土曜日のうち47回も出席した猛者もいて加賀から賞品をもたらったなどの記事が会報165号に載っている。

今回、山岳会に寄贈した霧の旅会の徽章(2番)は父・山崎金次郎(会員番号827番)のもので、

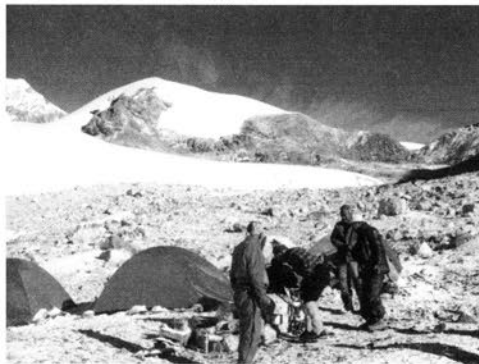
山岳会入会の推薦者は木暮、武田両氏の「喜んで推薦する」という手紙を見た記憶がある。

70歳から中国未踏峰に挑戦 5年連続6座に登る

宮本 数男

福井の山から癒しと元気をいただき、日本三百名山に登り、世界の山に登る。

1971年マッキンリーに登り、福井県庁を退職、コンサルタントを経営し、海外の山どころではなかった。88年カナディアンロッキーから始まり、キリマンジャロ、中央尖山、キナバル山、雪山、玉山、アコンカグア、エヴェレスト



C2からのチュンガチンサン峰

ト・トレッキング、アンナプルナ山群トレッキングと毎年参加、しかし、何かもの足りない気分だった。99年「中高原未踏峰登山隊」に参加、チベットのチュンガ・ロース峰6122メートルに登る。00年、甘肅省大雪山群の無名峰5152メートル、01年チベットのラー・ユン峰6020メートル、ユー・チ1峰6012メートル、02年ロンズラ峰5950メートルに登る。

03年もまた登山の醍醐味、未踏峰の魔力と「ラサ」の魅力に負けて、9月2日から19日までチベットに滞在し、中国チベット自治区ニンチェンタンクラ山脈の未踏峰・チュンガチンサン峰6008メートルに登った。

9月2日、福井から博多まで電車、福岡空港から上海経由で成都へ行き、ホテルに泊まる。

3日・雨、ラサのクンガ空港の気象状態が悪く、成都に引き返し機内で待機。西南航空の機内誌に柏澄子さんの「春の海で思い出すチベットの頂」を読む。文中に「登山には、決して消すことのできないリスクが内在する。そのリスクは、山に登る者それぞれが負うものである。ときとして、リス

クを負わないと見えてこないものが自然のなかにはある、と私は思っている」とある。ラサに着き、5日まで滞在する。

6・8日、偵察、高度順化の後BC入り。9日、C1入り、10日まで偵察。11日、C2入り。

12日・雪曇り・晴、朝テントから出ると20センチほど雪が積もっていた。頂上に立つ日だ。曇っていたが山が見えた。若い56歳の有田さんに続いて12時に未踏のチュンガチンサン峰に登る。99年に登ったチュングルース峰が見えた。三角錐のきれいな雪の山だ。

山の本の古書店

在庫目録年2回(5月・11月)発行
ご希望の方お申込ください。

ご蔵書を整理するときはぜひ弊店に!



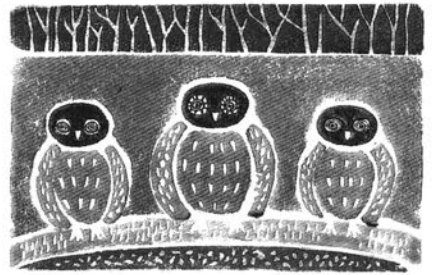
古書買入

晴山書房

東京都中野区上鷺宮4-6-3

TEL&FAX 03(3990)4540

図書紹介



幸せを呼ぶ鳥 版画・奥野溪石

『植村直己 妻への手紙』

植村直己・著

植村直己が妻に送った手紙143通と絵日記26枚が収まっている。手紙は結婚する1974年から最後の手紙となった1984年までの海外での山や探検や活動から送られたもの。

妻と過ごした10年間は植村が世界的冒険家となった時期である。北極や南極のほか、厳冬のエヴェレスト登山隊長やミネソタでの野外学校入学などエネルギーな活動をした。この時期の半分近くを海外にいた植村が妻に送った手紙には、飾らない筆で細かい報告と妻への思いが綴られている。

「夢中で暮らした10年間」と題した妻の公子さんのあとがきに「これは私ひとりだけの『北極圏1万2千キロ』、そして植村直己物語です。本来なら私の棺桶に入れて墓場まで持ってゆくべきものだったのですが……」とあるように、手紙にはふたりだけの心の交信の跡が刻まれている。

どの手紙にも冒険に全てをかける植村の姿がある。その過程には困難な壁や失敗もあり、苛立ちや弱音を吐くこともある。不運に遭ったエヴェレスト登山隊では、隊長の苦悩を生々しくぶつける。

本書の主要部分を占める北極圏1万2千キロ単独犬ぞり旅では、妻へ手紙を書くことが何よりの気休めであった。妻からの手紙を繰り返し読む植村。「心から俺を見守ってくれ、俺は本当に君に感謝するとともに幸せを感じている。どんなことがあっても死にはせん。やり通す意地が燃えてくる」と書く。過酷な旅のなかで必死で書いたと思う60通の心打たれる手紙。手紙からは妻との愛と冒険の夢に全力を注いだ植村の熱い思いが新鮮に伝わってくる。

(三栖 寿生)

2002年10月 文藝春秋発行
文春新書 262頁 750円

Judy & Tashi Tenzing・著 『TENZING and the Sherpas of EVEREST』

1953年、ヒラリーとともにテンジン・ノルゲイがエヴェレスト頂上に立った。あれから50年になろうとする直前、その人の孫であるタシ・テンジンと、オーストラリア出身の女性であるその妻ジュディが『テンジン、およびエヴェレストのシェルパたち』を書いた。この女性にはヒマラヤでの最初の女流山岳ガイドのひとりとして活躍した後に、シェルパである男性と結婚し、ヒマラヤとインド文化と歴史を母国で教える人となった。

イギリスをはじめ登山隊を組織した国々の登頂者がつねに主役として脚光を浴び、シェルパたちは脇役を演じ続けた。本書は、テンジンの家系とエヴェレスト登攀への貢献の歴史をシェルパの視点から詳しく語る。ヒマラヤの高峰に挑む登山隊への貢献がはじまった1920年代以降のシェルパのエヴェレスト登頂史としてばかりで

なく、シェルパの生活と文化の歴史として読んでも面白い。

4月末に本書の日本語訳が出版された。地名人名のカタカナ表記に多々疑問点のある訳書だが、内容を把握するには足りる。しかし、多数の写真と、エヴェレストに登頂したシェルパたちの名を連ねる詳細な年表は訳書にない。

エヴェレストに挑む外国の登山隊を通じて、山の民が国際化を上げる過程を、写真と年表を通じて確かめてみるのも面白からう。

(宮下 啓三)

2002年、ロバート・ヘイル社(イギリス)発行 211頁
訳書『テンジン エベレスト登頂とシェルパ英雄伝』(丸田浩、広川弓子訳) 2003年4月
晶文社発行 350頁

『遥かなるヒマラヤ 絵描きトレッキング紀行』

小野克之・著

ヒマラヤの厳しい自然のなかに身をおいて、油絵を描くひとりの画家の8か月間のトレッキングと絵画制作の記録。

著者が山にとりつかれたのは、

1987年にカシユガルからクンジュラ峠を越えたとき目にしたナンガバルバットだった。その瞬間、著者の中で何かが弾け、風景を見て初めて涙した。「描くならこれだ！」と腹を決め中学の美術教師を辞めて、年の半分をヒマラヤ、カラコルムの山中で過ごし、現場で絵を描く生活が続いている。

本書はチベット編、ネパール編、パキスタン編の3部からなり、2001年5月にチベット高原でシヤパンマを描いてから、パキスタンに移り、ヒンドークシュのティリチミールを北面、南面より描き、続いてバルトロ氷河をK2のBCまで入りK2を描いた旅が綴られている。

一時帰国後、9月にネパール・マカール山群へ出かけた。現地スタツフとポーター各3人という少人数で、降り続く雨とヒルに悩まされながらのトレッキングで、マカールのキャンプ地に着いた。5300mの高所でマカール南壁、西壁などを描き、滞在すること1か月余での下山は降雪の中であつた。

著者の山の絵を描く姿勢は現場主義であつて、雪崩や落石、氷河

のクレバスなどへの危険を伴う。

また寒気、強風といった厳しい自然との闘いが強いられる。そのような過酷な現地での制作にこだわ

る理由は、下りてから思い出しながら描くのでは感動のヴォルテージが違いすぎるからであるという。

(大橋 晋)

2003年1月 論創社発行

283頁 2000円

『山名考』

池田光二・著

昭和34年6月、著者は木曾駒に登った帰り道、飯田線の電車を待つ間、天竜川にかかる大橋の上から木曾駒と甲斐駒を眺めていた。その時通りがかりの地元の人が話しかけてきた。「お山に登つておいででしたか」「ええ、ここから眺める木曾駒ヶ岳と甲斐駒ヶ岳はまったくすばらしいですね」「ああ。あのお山ですか。西駒ヶ岳と東駒ヶ岳ですよ」

山名はその土地に住む人々の歴史であり、生活である。その後は、山に登るたびに山名が頭に入り込んで離れなくなった。著者の山名考はこうして始まった。

以下、本文20章、全国の山名のルーツを名前の種類別に分け、古くは古事記、万葉集などから調べられ、解説されている。

まず富士と浅間、アイヌ語と山名、山の人たちの名付けた山名、里人と雪の山、剣、槍、鋸の山名、動物の山名、信仰に由来する山名、山(せん)と呼ぶ山などがエッセイ風に綴られているが、山名の語源を深く辿っていく記述は研究本といえる内容と思われる。

最後に著者は、終りにと題して、地名では市町村合併や、地番町名の整理など、政治的に毒された地

名や宅地造成による、いわゆる美名をこじつける地名が続出しているありさまから、山名にも妙なものが出現することを心配している。一例として、白馬岳(シロウマダケ、ハクバダケ)の例をあげている。商業主義や政治政略などによつて勝手に山の名前を変えてもらいたくない。

山を愛する人々の力によって、美しく正しく山の名前が後世に受け継がれていくことを願っている、と結ばれている。(茂見 猛)

文芸社 2003年3月発行

157頁 1200円

「山の本」新刊発売中!!

関西の沢登り(1) 台 高 の 沢

樋上嘉秀 著 四六判 230頁 本体1,900円

台高山系の谷は水量も豊富、数十米の大滝をいくつも架けて豪快。32谷を厳選して詳細地図付きで紹介。

鈴鹿の山を歩く

草川啓三 著 四六判 330頁 本体2,500円

全山約85のプロフィールとガイド。珠玉の尾根歩きコース20を紹介。カラーフォトエッセイなど、盛沢山な内容。

●好評発売中

全世界紀行―民族と歴史、そして冒険

南里章二 著 (9364) A5判 480頁 本体2,700円

シルクロード、ヒマラヤの踏査。コンゴ、アマゾン川下り。サハラ砂漠縦横断など、世界全独立国192カ国を旅して。

カラコルム・ヒンズークシュ登山地図

〔付〕カラコルム・ヒンズークシュ山岳研究

A4変型判 上製美装ケース入 385ページ B全判地図13葉

宮森常雄(秩父宮記念山岳賞受賞)・雁部貞夫 共著

◎好評発売中!! 定価(本体33,000円+税)

ナカニシヤ出版

〒606-8316 京都市左京区吉田二本松町2
Tel.075-751-1211 Fax.075-751-2665
URL http://www.nakanishiya.co.jp/

Climbing & Medicine · 27**山岳救助国際委員会(ICAR)による
「凍傷の現場対策」****中島 道郎**

- 凍傷とは——身体の限局性寒冷障害。
- 罹患素因——脱水・過労・健康不良・防寒対策不備・湿潤・強風・身体が動かせない諸事情、外傷例えば骨折、高所環境、凍傷前歴、装着具による循環障害例えばハーネス・きつい靴・腕時計や指輪、基礎疾患例えば糖尿病・レイノー氏病、アルコール・ニコチン・麻薬摂取。
- 予防対策——要するに上記の諸素因を避けること。特に靴と手袋が重要で、常に良質・防風・緩やか、に気を配る。
- 症状、徴候——局所蒼白・かじかみに始まり、だんだん感覚がなくなってゆく。痛みなし。
- 応急現場対策
◇野外で——風を避け、温かい飲物を摂る。靴を脱ぎ乾いた靴下(手袋も同様)に履き替える。足や手を仲間の股間とか腋の下で暖めて貰い

(ただし10分間だけ)、靴をまた履く。疼痛緩和と循環促進の目的で、アスピリンもしくはイブプロフェン(薬剤過敏症でなければ)、1～2錠のませる。患部を摩擦すること、直接火にかざすことは厳禁。感覚が戻れば再び歩き始めて構わない。感覚が戻らなければそのまま最も近い避難所(山小屋、ベースキャンプ)まで行く。
◇高所では酸素吸入(10分間の再加温で感覚が戻れば予後は良い。しかしそれは予防の失敗を意味し、それを改めない限り再発する)。
◇避難所(ベースキャンプ、山小屋等)で靴を脱ぎ衣服を全部着替え指輪は外す。温かい飲物を飲む。アルコールは差し支えない。

- 急速再加温——直火・摩擦厳禁。患部を37℃の温湯に浸す(産湯温、肘で確かめる)。熱湯を少しずつ足しながら温度を保たせる。患部の温度が非患部の温度になるまで、あるいは色が戻るまで(足なら約1時間)温める。乾かし、清潔な布を緩やかに巻く。再加温したらもう歩いてはならない。必ず担架に載せて搬出する。水疱は破らない。下山中に再凍結する恐れがある場合は、むしろ加温せず、そのまま可及的速やかに病院へ送る。

(出典: David Syme: High Alt Med Biol, 3:297-298, 2002)

●資料の受け入れ●**資料・映像委員会 鈴木 敬吾**

次の資料をご寄贈いただき、当委員会として受け入れました。

資料名: 霧の旅会の徴証(山崎金次郎氏遺品)

寄贈者: 山崎郁郎様(会員番号6201)

受入日: 平成15年10月20日

資料名: アイゼン(9本爪)

寄贈者: 鈴木康義様(会員番号3766)【永年会員】

受入日: 平成15年11月1日

10月		1日	2日	3日	6日	7日	8日	9日	15日	16日	17日	18日	20日
ルーム日誌		秩父宮記念山岳賞審査委員会 総務委員会	山岳地理クラブ 02同期会 フォトビデオクラブ	自然保護委員会 百周年記念フォーラム委員会	JAC01会 総務委員会 常務理事会	アルパインスケッチクラブ 理事会	アルパインスキークラブ つくも会	総務委員会 山の自然学研究会 学生部	山研運営委員会 三水会	アルパインスケッチクラブ 科学委員会 百周年記念フォーラム委員会	97同期会 海外委員会 総務委員会	新入会員オリエンテーション 百年史委員会	

会務報告

10月理事会

日時 10月8日(水)18時30分～20時
場所 日本山岳学会議室

「出席者」平山会長、芳賀、平林、橋本各副会長、藤本、今村、朴元、賛田、田村、黒川、鈴木、野口、石田、篠崎、鳥居各理事、内田、一力各監事、宮崎、鰐坂、小倉(董)、重廣各常任評議員
「委任」小川、大蔵各理事、西村常任評議員

【報告事項】

1 『山』10月号の内容について

今村

9月号のカラー化に対して反響大であった。年1回程度考えてみたい。10月からは白黒に戻る。今月から100周年のコラムが始まる。今月は会長、来月は平林委員長と次々によりしくお願いしたい。

2 予算管理月報

橋本

順調に推移している。予算管理月報は毎月作成しているが、理事会への報告は3か月に1度(1/4期毎)にしたい。異常のある時は随時報告する。

新入会員は156人と昨年まで

に比べ30～40人少ない。100周年募金は567万円。

3 山研の閉所および年末年始開所
山研の利用は11月7日(金)まで。年末年始は12月30日～1月3日(泊)まで開所する。

藤本

4 平成15年度年次晩餐会展示企画
100周年記念事業企画内容
フォトクラブ写真展
深田久弥生誕100周年記念著作展示

5 第2回山岳科学フォーラム
「登山の将来」協賛の件 篠崎
11月22～23日 松本で開催。

(承認)

6 地区集会
東北・北海道地区集會を北海道ニセコ温泉にて平成16年7月1～18日実施する。

藤本

九州地区集會を宮崎市ひまわり荘、登山は釈迦方岳にて平成16年1月17～18日実施する。

藤本

7 協賛依頼
富士山憲章制定5周年記念フォーラム、11月19～20日富士宮市民文化会館にて。

(承認)

「岩橋崇至 山の世界」写真展、11月27日～12月1日沖縄コンベン

ションセンターにて (承認)

8 使用許諾
ニュース「日本の登山隊 エヴエレスト登頂」日の丸を掲げる隊員、NHKエンタープライズ

(承認)

9 その他
全国自然保護集会 篠崎
10月11～13日、会長出席。

堀田さん講演会「山に生きて94年・立山からヒマラヤへ」 鈴木
10月16日、東京体育館。

ブータン観光局との面談 藤本
10月2日、会長、芳賀、橋本両副会長、藤本で面談した。

新入会員オリエンテーション
10月18日実施する。 藤本
秩父宮記念山岳賞の審査 芳賀
10月1日、木下委員長以下9名で審査を行った。

【審議事項】
1 100周年記念事業計画の件
組織および役員の決定 藤本
別紙の如く決定した。(承認)
実行予算の考え方 橋本
(以下承認)

①総予算8500万円のうち10%程度(できれば1000万円)は予備費にする。
②現状で文化事業費合計は456

総務委員会
資料委員会

21日 インターネット小委員会

学生部

22日 二火会 00同期会

23日 学生部 山遊会

事業委員会

24日 図書委員会

青年部

28日 図書委員会

自然保護委員会

百周年記念フォーラム委員会

九五会

29日 アルパインスキークラブ

10月来室者 610名



ATLAS TREK

個人手配旅行から人気のトレックツアーやエクスペディションのアレンジまで。充実度が違う「旅」のプランニングをここから提供しています。山旅などあらゆるジャンルを取り扱っています。お気軽にご連絡ください。

株式会社 アトラストレック
(国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京/〒160-0008 東京都新宿区三栄町23 TEL 03-3341-0030
大阪/〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号 TEL 06-6946-9111
名古屋/〒464-0807 名古屋千代田区東山通り5-113 オークラビル6F TEL 052-788-2422



- 5万円である。
- ③分水嶺登山480万円は記念登山に含める。
- ④文化事業費は現状の10〜20%減で考え実際の作業を進めてほしい。
- ⑤記念登山については大蔵委員長帰国後早急につめる。
- 事業内容説明 (以下承認)
- ①10月25日に全体集会を実施、それまでに、これまでに提出していただいた資料をもとにして各委員会のとりまとめを行う。 平林
- ②「日本人の足跡」について別紙のように詳細の説明があった。 黒川
- ③『山』で1ページずつ各委員会に割りふるので準備していただきたい。 藤本
- 2 201号室購入の件 橋本
- (以下承認)
- 常務理事会としては購入する方向で考えたが、理事会で決定してほしい。
- 長期改善計画にも当ビルの1階部分の購入も提案されている。
- 左記のような発言があった。
- ・買う方がよいのか、借りる方がよいのか。
- ・会員の増減について考慮されているのか。
- ・211号室は返すのか。
- 等あったが購入することで決定。
- 3 山研の会員向け名称変更の件 藤本
- 上高地口岳研究所から上高地口荘に変更する。 (承認)
- 4 インターネット規約の件 藤本
- 先日の資料に基づいて説明があった。 (承認)
- 5 その他
- 201号室を購入したことは、ここしばらく山岳会館を作る夢はないということを、会報で会員に知らせることが必要。 一力
- 会員異動
- 物故
- 青木 繁 (7413) 03・5・19
- 小林義明 (1984) 03・10・24
- 太田徳風 (6841) 03・10・26
- 山口政一 (7804) 03・10・27
- 田中茂夫 (9140) 03・10・27
- 退会
- 清水文左門 (7844) 岐阜
- 日江井榮二郎 (13118)
- 岡本光夫 (13475)
- 終身会員
- 鈴木 昭 (5641)

図書受入報告 (2003年10月)

著 者	書 名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入別
菊地俊朗	北アルプスこの百年(文春新書 No.347)	242pp/18cm	文藝春秋	2003	著者寄贈
廣川健太郎	チャレンジ! アルパインクライミング:南アルプス・八ヶ岳・谷川岳編	207pp/26cm	東京新聞出版局	2003	出版社寄贈
南川金一	山頂渉猟:2000m以上の642山その総てに登った男の記録	298pp/21cm	白山書房	2003	著者寄贈
蟹江健一	未完の頸城山地散歩	158pp/21cm	蟹江健一(私家版)	2002	松沢節夫氏寄贈
同志社大学学術登山隊(編著)	カキュ・カンリ:中国チベット自治区ロンライカンリ山群主峰初登頂の記録	237pp/27cm	信濃毎日新聞社	2003	編者寄贈
佐藤光雄	山岳巡礼	358pp/19cm	新ハイキング社	2003	出版社寄贈
立教大学登山隊(編)	クーンブヒマラヤ合宿報告書:立教大学山岳部創部80周年記念事業	46pp/30cm	立教大学	2003	発行者寄贈
Harish Kapadia(ed.)	The Himalayan Journal (Vol.59, 2003)	292pp/22cm	Oxford Univ. Press	2003	発行者寄贈
Martin Wells(ed.)	The Journal of the Mountain Club of South Africa (Nr.104, 2001)	220pp/24cm	M.C.of South Africa	2002	発行者寄贈
Edwin Bernbaum	Sacred Mountains of the World	291pp/31cm	Univ. of California Press	1997	購入

マナスル登頂50周年・日本山岳会創立100周年記念登山 マナスル中高年登山隊隊員募集 事業委員会

マナスル登頂50周年を迎える2005年、日本山岳会創立100周年を記念し、マナスル(8156m)に中高年による登山隊を送ります。当委員会では隊員を募集しています。女子会員歓迎。

本計画は中高年者のみによるヒマラヤ高峰登山を目的としており、計画完遂のために参加者の方に通常の海外登山と同様にそれぞれの役務分担をお願いします。過去のヒマラヤ登山経験は不問。

なお、参加希望をされても、必ずしも隊員として選考されるとは限りませんのでご承知ください。参加隊員になられた方には所定どおりの高所登山訓練に参加していただきます。

- 日程 平成17年3月18日～5月22日
 - 募集人員 8名
 - ペースマネージャー 3名
 - 費用 230万円
 - 資格 40～70歳の日本山岳会会員(過去の日本山岳会主催の海外登山経験者の方々には遠慮していただきます)
 - 申込 2004年3月末日までに氏名、住所、会員番号、電話、FAX、メール、過去の登山経歴等を記入し、手紙またはFAXにて下記宛。
 - あわせて支援トレッキング隊の募集もいたします。マナスルベース訪問。期間未定。手紙またはFAXにて下記宛。
 - 事業委員会シニア登山隊本部(電話受け付けは一切しません)
- 〒169-0051 新宿区西早稲田3-1-3西尾ビル5F FAX 03-5273-4823

◆志賀高原スキー懇親会 事業委員会

INFORMATION



イラスト 宇都木慎一

恒例のスキー懇親会を志賀高原
発哺温泉で開催します。
日程 2月6日(金)～8日(日)
費用 29500円
宿泊 発哺温泉 ホテル東館
定員 40名
現地集合・現地解散
申込 1月15日までに、会員番号、
住所、氏名を明記し、郵送、
FAX、メールで山崎浩子
宛(〒236-0033

横浜市金沢区東朝比奈1-1
65-3 FAX 045-782-
8712 y-hiro@fac3.so
net.ne.jp)
*参加申込者には案内を送ります。
◆第13回「山好きの山の絵展」
アルパインスケッチクラブ
会期 2月15日(日)～21日(土)
時間 11～17時(初日は13時から、
最終日は17時まで)
会場 東京交通会館2Fギャラリ
1(千代田区有楽町2-10-
1 TEL 03-3215-79
62 最寄り駅JR・地下
鉄有楽町駅A8番出口)
*入場無料
◆尾瀬スノーハイク&イグルー体
験 つくも会
初心者、地方支部会員大歓迎。
期日 2月14日(土)～15日(日)
宿泊 ロッジ長蔵14日16時集合
行程 15日 富士見下 富士見峠
往復(5～6時間)
費用 1万円(1泊2食)
装備 ワカン、スキーなど各自持
参、古いスキーの貸与あり
食糧 15日昼は各自持参
申込 2月5日までにFAXまた
は往復ハガキで平井喜久枝
宛(〒278-0035

野田市中野台495 FAX 0
471-2314307)
*山岳保険加入者対象
*イグルー作り体験希望者は申し
込み時にお知らせください。
◆第47回つくも会海外登山
期日 5月1～5日
対象 韓国・雪岳山、北漢山
費用 167000円(航空運賃、
ホテル4泊、朝、夕食4回、
現地移動、空港税ほか)
準備 日本の春山(ピッケル、ア
イゼンは不要)
食糧 行動食は各自現地調達
申込 12月末日までにハガキで諏
訪肇宛(〒306-023
1 茨城県猿島郡総和町小
堤1383-7 TEL & FAX 0
280-98-2153
Ssuwa@ca3.so-net.ne.jp)
*詳細は申込者に連絡します。

日本山岳会会報 山 703号

2003年(平成15年)12月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビュウハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 平山善吉
編集人 今村千秋
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社